



大正十三年
第三編

東京

○俳諧の友餘興發句募集廣告

(見本一冊郵税共郵券十五錢)

定時刊行
風流雜誌

俳諧の友

四六形二倍の大本高尙優美製本
五十頁以上一冊正價郵税共十五
錢毎月一回發行六冊半少年分前
金八十五錢十二冊一ヶ年分前金
一圓六十錢一冊前金拂込購讀者
には五句(一組)無入花掲載す以
上は一組毎に八錢とし

○本誌は俳諧に關する記事則ち、俳諧の友、諧話、傳記、初學心得、試問應答、寄書、雜報、競吟集、等と編輯して
逐號益々佳境に入らんとするものなれども餘興として競吟集の一欄を設け諸君が技藝と闘すの場所に充て互に相輝
するの好同伴となす然れども單に闘すのみにては更に興味の薄さを以て紀念の爲下に定むる撰法に據り當撰の難君
へ左記の物品と贈呈し以て其興を助く

秀 逸 銀 盃 一 個 但し當撰の詠句及雅號を蓋裡に刻す
天 地 人 木 盃 一 個 但し全上金時給

自一等至六等 六位曲亭馬琴翁著俳諧歲時季草各壹部宛 自七等至十六等十位松井鶴溪宗匠著俳諧
事大全各壹部宛 自十七等至五十等三十四位白日庵守朴大人編芭蕉翁發句集各壹部宛

此他各宗匠大家五名以上の撰法を請ひ五撰其次號誌上に掲載し上座各位に雅景を呈すべし

○俳諧の友餘興發句募集の各位は本誌競吟集欄に就き秀句五句を撰み撰法用紙に認めて着本后十日内に本社へ御送附
あれ本社は其撰法者の雅號及撰法句を悉く次號の誌上に掲げ是が點綴を以て何位を定め順次前項の物品と贈呈す

○課題は 四季戀雜 二號は十一月十三日發行第三號は十二月十三日發行

俳諧の友發行所 圖書出版合名會社

大阪市南區大寶寺町 坂俊 兄弟

仲ノ丁八十六番屋敷 兄弟

角座新狂言筋書

愚臣の諫言は妖魔の胸に

的中したる射術の極意

倭臣の諫言は愛妾の心に

適當したる毒酒の奸計

血天井怨恨山口

續 十

魁 龍 玉 作

●序幕

役人替名

冷泉雷刀流風	三五郎	今 取 郎 六	彦 三 郎
大内 隆隆	若 松	太 田 才 助	藤 藏
巖 生 駒	壽 三 郎	岸 本 林 八	當 久 治
岩 倉 玄 藏	當 十 郎	下 俣 幸 助	佐 十 郎
大澤 鉄之助	我 重	惡 漢 權 六	市 六
天神山の怪猫	瀧 之 助	中 川 清 藏	卯 十 郎

●天神山遊獵の場 本ふたい向ふ山の中遠見、正面竊家根本

連格子の大悲閣と記せし額を掲し社堂、雨車雷の音にて慕明

く、茲に岩倉玄藏、大澤鉄之助四天々ツささ大小にて腰をかけ

(鉄之助)今日の御遊獵は總て相良武任殿の思し立にて隙あらば
主人義隆公を、ト言ひかけ四邊へこなしあつて(鉄)萬一折を得
ざるに於ては此籠の一ツ家へ御休息をを勧め申す豫ての計らひ

(玄)シテ其一ツ家の囀に高き賤の女は居ましたか(鉄)某先刻
何彼の用意をさせん爲め参つてみれば彼の娘と申すは年の比十
七八世にも稀なる美人にして山家に惜み風姿容貌(玄)紫より色
を好ませ給ふ御主君の性質なれば女を勧めて愛妾となし淫酒を
以て君の心を誘はす計略、ト是を雨車に成り(玄)ナ、又降つて参
つた雨舎りの爲め暫時是なる堂の内にて、ト兩人社堂の内へ入
る此内向ふより幸助老たる百姓の拵るにて出て來り(幸助)ヤ
レ、俄雨で酷い目に遭た小降になるまで此社堂で雨舎りをし
て行ふ、ト社堂の様に打腹かけ(幸)今日は此國の領主が天神山
へ狩にね出なされたとの事大きに夫は悪い事ぢやあらたかな天
神様の御附で俄の此大雷大雨に遭ない今の領主は御政道は放
棄かして明ても暮ても酒宴遊興下下の町人百姓が困窮するに
は氣がつかれず榮耀榮華御家來も澤山あれ御諫言申上げる人
は一人もないと見ゆるわい數代つゝし大内のね家も今に滅茶

○俳諧の友餘興發句募集廣告

(見本一冊郵税共郵券十五錢)

定時刊行
風流雜誌

俳諧の友

四六形二倍の大本高尚優美製本
五十頁以上一冊正價郵税共十五
錢毎月一回發行六冊半少年分前
金八十五錢十二冊一ヶ年分前金
一圓六十錢一冊前金拂込購讀者
には五句(一組)無入花掲載す以
上は一組毎に八錢とし

○本誌は俳諧に關する記事則ち、俳諧の友、諧話、傳記、初學心得、試問應答、寄書、雜報、競吟集、等を編輯して
逐號益々佳境に入らんとするものなれども餘興として競吟集の一欄を設け諸君が技藝と闘すの場所に充て互に相續
するの好同伴となす然れども單に闘すのみにては更に興味の薄きを以て紀念の爲下に定むる撰法に據り當撰の權君
へ左記の物品と贈呈し以て其興を助く

秀逸 銀盃一個 但し當撰の詠句及雅號を蓋裡に刻す
天地人 木盃一個 但し全上金時給

自一等至六等 六位曲亭馬琴翁著俳諧歲時季草各壹部宛 自七等至十六等十位松井鶴義宗匠著俳諧
事大全各壹部宛 自十七等至五十等三十四位白日庵守朴大人編芭蕉翁發句集各壹部宛

此他各宗匠大家五名以上の撰法を請ひ五撰其次號誌上に掲載し上座各位に雅景を呈すべし
○俳諧の友餘興發句募集の各位は本誌競吟集欄に就き秀句五句を撰み撰法用紙に認めて着本后十日内に本社へ郵送附
われ本社は其撰法者の雅號及撰法句を悉く次號の誌上に掲げ是が點綴を以て句位を定め順次前項の物品と贈呈す

○課題は 四季戀雜

の混題とし毎月末日を以て締切り廻着の分は翌月廻しとす第
二號は十一月十三日發行第三號は十二月十三日發行

俳諧の友發行所

大坂市南區大寶寺町 坂俊 圖書出版合名會社
仲ノ丁八十六番屋敷 兄弟

角座新狂言筋書

忠臣の諫言は妖魔の胸に

的中したる射術の極意

倭臣の諛言は愛妾の心に

適當したる毒酒の奸計

血天井怨恨山口

續十

魁龍玉作

●序幕

役人替名

冷泉御刀清胤	三五郎	今取那六	彦三郎
大内 義隆	若 松	太田 才助	藤 藏
根 生剛	壽三郎	岸 本 林八	當 久 治
岩 倉 玄藏	當十郎	下 僕 幸助	佐 十 郎
大澤 鉄之助	我 重	悪 漢 橋六	市 六
天神山の怪猫	瀧之助	中 川 清藏	卯 十 郎

●天神山遊獵の場 本々たい向ふ山の中遠見、正面藪家根木
連格子の大慈閣と記せし額を掲し辻堂、雨車雷の音にて幕明
く、茲に岩倉玄藏、大澤鉄之助四天々ツささ大小にて腰をかけ
(鉄之助 今日御遊獵は總て相良武任殿の思し立にて隙あらば
主人義隆公を、ト言ひかけ四邊へこなしあつて(鉄)萬一折を得
ざるに於ては此處の一ツ家へ御休息をを勧め申す豫ての計らひ

(五) シテ其一ツ家の障に高き賤の女は居ましたか(鉄) 某光刻
何彼の用意をさせん爲め参つてみれば彼の娘と申すは年の比十
七八世にも稀なる美人にして山家に惜き風姿容貌(五) 素より色
を好ませ給ふ御主君の性質なれば女を勤めて嬖妾となし淫酒を
以て君の心を誘かす計略、ト是を雨車に成り(五) ナ、又降て参
つた雨舎りの爲め暫時是なる堂の内にて、ト兩人辻堂の内へ入
る此内向ふより幸助老たる百姓の指を以て出て來り(幸助) ヤ
レ、俄雨で酷い目に遭た小降になるまで此辻堂で雨舎りをし
て行ふ、ト辻堂の様に打腰かけ(幸) 今日此國の領主が天神山
へ狩にた出なされたの事大きに夫は悪い事ぢやあらたかな天
神様の御罰で俄の此大雷 大雨に遭ない今の領主は御政道は放
棄かして明ても暮ても酒宴遊興下下の町人百姓が困窮するに
は氣がつかれず榮耀豪華御家來も澤山あれ御諫言申上げる人
は一人もないと見ゆるわい數代つゝし大内の家も今に滅茶

くは散れる事であらうア、氣の毒な事ぢやなア、ト歎息のこなし此時社堂の内より以前の兩人出て(鉄)れのれ土百姓の分際として國の守を誹謗する憎くも奴縛り上て御前へ引け、ト幸助縛り上手へ連れて入る跡に玄藏こなしあつて(玄)相良武任殿と心を合せ主家を押領れさん豫ての大望何うか首尾能う行はよいがな、ト詠の合方にて此道具ふん廻す

○帶刀不興の場 本ふたい山又山の遠見、所々松柏の立樹、上手に瀧の流れ、すべて用防國天神山絶頂の体、茲に大内義隆中川清藏大澤鉄之助今阪郡六太田才助岸本林八何れも四天ふつさき大小にて居列び居る、窺入り瀧の音にて道具納る(清藏)今日の御遊獵俄の雨も小やみ斯く快晴と相成り恐惶至極に存じ奉る、ト此時下手より以前の玄藏出て來り(玄)我君へ申上るる是より三十町ばかり南に方り一ツの洞穴あり四邊には雉子の羽(玄)羽兎兎猿の骨とも分らず散亂致し居り升る必定年経る(玄)巢窟と相見候(義)夫にて思ひ當る事ころわれ二十年以前我父義興此天神山に狩倉し玉ひ千年を經たらん山猫を退治ありしと聞及イヤは是より彼所に赴き其巢窟を廢拂ひ怪獸を退治てくれん、ト立上る此時向ふ戸家口よりアイヤ暫くくと言ながら冷泉帶刀出て來り(帶刀)重き御身を輕く敷れ供の同勢も少きに此山谷を馳廻り給ひ萬一御身に凶事ばしあらば家中は勿論民百姓に到るまで暗夜に燈火を失ふたらんが如し獸一定撃取り玉しとて何程の御手柄になりませうや君子は危きに近寄



らすとかや何卒此義は止り下さませう(玄)アイヤ帶刀殿治に居て亂を忘れざるは武士のたしなみ假初の御遊獵にも武道に心を用ひ玉ふ太守の御器量御不行跡とは言れまじ(帶)田畑を荒す惡獸を狩捕は耕作を助け民を憐れむ仁政の一ツともいふべきなれと斯く深山に深入りして谷間に棲る獸一定撃捕たればとて民百姓の登夫助けにはなり升まい是非とも今日の御催しを止められ御歸館あるやう偏へに願ひ奉る(義)隆)やア過言なり帶刀謙言に事寄せて余が非を數え愚將なりと言ねばかりの汝の言棄誇う申さば手は見せぬ(帶)お家の爲め主君の爲めには一命惜む帶刀ならず御手討は覺悟の前(義)ヤア我詞を用ひぬ不忠者の戒めは、ト帶刀の傍に寄り扇を以てカウ〜と續け打に打ことあつて(義)唯今より閉門申附る(帶)ナ閉門仰せつけらるゝと(義)目通りは相かなわぬ(帶)ハ、ハア、ハ、ト平伏する敵役の諸士顔見合せ氣味よき思入あつて(玄)御閉門とはハテ氣の毒千萬な、ト是を兩車に成り(義)又降出して參つれば今日の狩倉も是限り歸館致すであらう(玄)主君にはマツ(皆々)れ立あらせませう、ト皆々附添ひ向ふへ入る帶刀跡を見送りこなしわつて(帶)相良を初め一味の者ども動もすれば忠義の臣を君に説いて退けんとす彼等が振舞油断ならざる、ト起上るが木頭にて此道具ふん廻す

●一ツ家生駒住家の場 本ふたい三間の二重押入納戸口、上手折廻りの家体、門口に松の立樹、すべて山中一ツ家の体、茲

に義隆殿革の上に住む盃を持ち、下手に生駒島田殿娘の拵へにて小猫を抱き蓋かきこなしにて俯む居る、此見得合方にて道具とまる(義)今日天神山に遊獵なし俄雨にて料らすも此家の軒に雨舎り、見受けし所汝は猫を愛する様子其猫の名は何と申す(生駒)ハイ小富士と申す(義)小富士とは好い名ぢやのウ傳は聞く往古女三の宮と申奉りしは絶世の美人なりしが常に猫を愛し玉ひしとかや其女三の宮の容色にも劣らぬ汝が美麗さコリヤ生駒なんど余に宮仕にする心はないか(生駒)冥加に餘るに詞なれど、ト夜に咲たる山吹を折て差出す(義)古太田道鑑伏家の軒に雨具を乞ひし故事は聞及べど夫と是とは事かはり、ト思案のこなしあつて、扱は言替したる真人があるか(生)殿御といふはありながら鶯の袋の隔てられ焦れて暮す此年月語るも涙の種にムり升る(義)スリヤ如何様に申しても(生)御免されて下さりませ、ト立んとするを義隆殿を押けて屹度なる此時下手より玄藏以前の百姓幸助を縛り出て來り庭に引ずけるを見生駒は愕き(生)ヤ、スリヤ何故に幸助には此細目、モウシ殿様何ういふ科かは存じませぬ幸助の代りに私を縛り免してやりり升るやら假令命を召るゝとも因縁事と諦めて居わい(義)イヤナニ生駒余が心にさぬ隨へば幸助の科は免してくれ(玄)幸助を生さうと殺さうと和女の心唯一ツウンといふて我君の御心に隨ふが宜かりさうなもの(幸)イヤ假令何とねつしやつても

くは散れる事であらうア、氣の毒な事ぢやなア、ト歎息のこなし此時辻堂の内より以前の兩人出て(鉄)れのれ土百姓の分際として國の守を誹謗する憎くき奴縛り上げて御前へ引け、ト幸助を縛り上手へ連れて入る跡に玄藏こなしあつて(玄)相良武任殿と心を合せ主家を押領れさん縁ての大望何うか首尾能う行ばよいかな、ト詭の合方にて此道具ふん廻す

○帶刀不興の場 本ふたい山又山の遠見、所々松柏の立樹、上手に瀧の流れ、すべて周防國天神山絶頂の体、茲に大内義隆中川清藏大澤鉄之助今阪郡六太田才助岸本林八何れも四天ぶつさき大小にて居列び居る、裾入り瀧の音にて道具納る(清藏)今日の御遊獵俄の雨も小やみ斯く快晴と相成り恐悦至極に存じ奉る、ト此時下手より以前の玄藏出て來り(玄藏)我君へ申上るる是より三十町ばかり南に方り一ツの洞穴あり四邊には雉子の羽根、羽兎兎猿の骨とも分らず散亂致し居り升る必定年経る(玄藏)巢窟と相見候(義隆)夫にて思ひ當る事ころあれ二十年以前我父義興此天神山に狩倉し玉ひ千年を経たらん山猫を退治ありしと聞及イデヤ是より彼所に赴き其巢窟を焼拂ひ怪獸を退治てくれん、ト立上る此時向ふ戸家口よりアイヤ暫くくと言ながら冷泉帶刀出て來り(帶刀)重き御身を輕々敷れ供の同勢も少きに此山谷を駆廻り給ひ萬一御身に凶事ばしあらば家中は勿論民百姓に到るまで暗夜に燈火を失ふたらんが如し歌一疋撃取り玉しとて何程の御手柄になりませうや君子は危きに近寄



らすとかや何卒此義は止り下りませう(玄)アイヤ帶刀殿治に居て亂を忘れざるは武士のたしなみ假初の御遊獵にも武道に心を用ひ玉ふ太守の御器量御不行跡とは言れまじ(帶)田畑を荒す惡職を狩捕は耕作を助け民を憐れむ仁政の一ツともいふべきなれと斯く深山に深入りして谷間に棲る獸一疋撃捕たればとて民百姓の豈夫助けにはなり升まい是非とも今日の御催しを止められ御歸館あるやう偏へに願ひ奉る(義隆)やア過言なり帶刀諫言に事寄せて余が非を數え愚將なりと言ねばかりの汝の言葉諷う申さば手は見せぬ(帶)我家の爲め主君の爲めには一命惜む帶刀ならず御手柄は覺悟の前(義)ヤア我詞を用ひぬ不忠者の戒めは、ト帶刀の傍に寄り扇を以てカウくくど續け打に打ことあつて(義)唯今より閉門申附る(帶)ナニ閉門仰せつけらるゝと(義)目通りは相かなわぬ(帶)ハ、ハア、ハ、ハ、ト平伏する敵役の諸士顔見合せ氣味よき思入あつて(玄)御閉門とはハテ氣の毒千萬な、ト是を雨車に成り(義)又降出して參つたれば今日の狩倉も是限り歸館致すであらう(玄)主君にはマツ(皆々)ね立あられませう、ト皆々附添ひ向ふへ入る帶刀跡を見送りこなしあつて(帶)相良を初め一味の者ども動もすれば忠義の臣を君に讒して退げんとす彼等が振舞油斷ならざる、ト起上るが木頭にて此道具ふん廻す

●一ツ家生駒住家の場 本ふたい三間の二重押入納戸口、上手折廻りの家体、門口に松の立樹、すべて山中一ツ家の体、茲

に義隆敷草の上に住む盃を持ち、下手に生駒島田嬢の拵へにて小猫を抱き差かしこなしにて俯む居る、此見得合方に道具とまる(義)今日天神山に遊獵なし俄雨にて料らすも此家の軒に雨舎り、見受けし所は猫を愛する様子其猫の名は何と申す(生駒)ハイ小富士と申す(義)小富士とは好い名ぢやのウ傳は聞く往古女三の宮と申奉りしは絶世の美人なりしが常に猫を愛し玉ひしとかや其女三の宮の容色にも劣らぬ汝が美麗さコリヤ生駒なんど余に宮仕仕する心はないか(生駒)冥加に餘るた詞なれど、ト夜に咲たる山吹を折て差出す(義)古太田道鐘伏家の軒に雨具を乞ひし故事は聞及べど夫と是とは事かはり、ト思案のこなしあつて、扱は言替したる良人があるか(生)殿御といふはありながら鶯の袋の隔てられ焦れて暮す此年月語るも涙の種にムリ升る(義)スリヤ如何様に申しても(生)御免されて下さりませ、ト立んとするを義隆を押して屹度なる此時下手より玄藏以前の百姓幸助を縛り出て來り庭に引ずるを見生駒は愕き(生)ヤ、スリヤ何故に幸助には此細目、モウシ殿様何ういふ科かは存じませぬと幸助の代りに私を縛り免してやつて下さりませね願ひでムリ升る(幸)モウシね様何をれつしやり升るやら假令命を召るゝとも因縁事と諦めて居わい(義)イヤナニ生駒余が心にさゆ隨へば幸助の科は免してくれ(幸)幸助を生さうと殺さうと和女の心唯一ツワンといふて我君の御心に隨ふが宜かりさうなもの(幸)イヤ假令何とれつしやつてもた

嬢さまには許嫁の(義)何ういへば彼ういふと不禮な奴ウメ二ツに、ト立かゝる(玄)イヤ我君御立腹は去る事ながら今日の所は御歸館のつて然るべく存じ升る(義)然らば汝に任せ置ん供嗣はせ、ト是にて下手より以前の諸士皆々出て来る義隆松の枝を折り(義)色變ぬ常盤の松も春くれば、ソレ松の常盤、ナア篤と判斷致して置やれ、ト皆々附添ひ幸助引立向ふへ入る跡に玄蔵一人残り(玄)コリヤ生駒追附迎ひの籠を寄來す間其迄に篤と思案を致し置け、ト向ふへ入る(生)色變ぬ松の操どれつしやたはハ、ア分つた貞女を破つて幸助の命を助けよとある松の語といふて許嫁の良夫へ濟す此上は宮中にゑる父さんの所へ往て俱々相談するのが近道迎ひの來ぬ間チ、然うぢや、ト身隠ひをする此時納戸口より悪漢權六出て來り前に立塞がり(權六)何も彼も残らず聞た領主に初物せしめられては日比の苦心が水の泡サア(生)エ、モあたらしい厭ぢやわいなア(權)然う言

●天神山猫塚の場 本ふたい高二重山又山の遠見、正面に猫塚と記せし莫大なる塚、床の上るりにて道具となる。一折柄茲へいさせと路を急いで驅來る生駒、ト向ふより生駒走り出て來り(生)ヤレ、嬉しや此處までくればモウ迎ひの者に逢ふ氣遣ひなし、ト四邊見廻し不審の思入、ハテ合點のめかぬ此處は猫塚何うして路を取違わたら、餘りの事に不思議立四邊キコロ、うつとりと少馬あきれて居たりける、ト此時以前の權六上手より頬冠りして出て來り(權)人目なければ此處に於て、ト手込に仕様とする是よれり攪り合の立廻りに成り好ま程の月を出し種々の立廻りあつて、ト大ドロ、ト成り小猫小富士は生駒の咽に喰ひつき權六を掴むし生駒の死骸は谷間に落ち込み權六は悶絶する。一時に不思議や猫塚の岩石あばいて顯はる、ト大ドロ、トにて金毛の大猫ノサ、ト出て四邊を見廻す此間下手より切替物物を昇ぎ侍八人出て來り大猫が生駒と見ゆる思入にて猿轡を食せ轡子に乗せ向ふへ入る跡本釣鐘を打込み權六心付き起上り身体を撫で合點のめかぬ思入此時上手より岩倉玄藏出て來り兩人だんまりの立廻りあつて引張の見得よろしく山嵐の鐘にて拍子幕

●二幕目 役人替名

愛妾 生駒の方	瀧之助	相賀の腰元	若菜	松の助
實は天神山猫	同	同	菊江	芝市
武任の妻	波	生駒の侍女	春野	卯三次
腰元	ねくら	同	小夏	霞十郎
太田	オ	同	秋箱	三孝
岸本	林	同	冬路	角次郎
若徒	唯助	同	相賀	武任
同	厂助	同	仲間	近習
同	勇次郎	同	同	徒士大勢

●相賀武任郎玄關先の場 本ふたい三間の二重、敷臺附の玄關、茲に才助林八進物臺に上たる物を中間に持せ立て居る若徒馬助一本差にて手をつかへて居る、此もやう調へにて慕明(才助)武任殿には主君の御名代と云つて嚴島明神への御參詣(林八)御道中恙なく御歸着と承り御喜びの印までに輕少ながら持參の品(才)宜敷御披露願ひ存する、ト是にて才助は兩人を案内して奥へ入る此時向ふにて「ね旦那の御下城」と觸込み物先きに仲間足輕大勢附添ひ出て來り玄關に昇すねると窓の内より武任着附上下にて出る此内奥より妻の夕波侍女倉若菜菊江附るひ出て武任を出迎ふ此時侍一人走り出て來り(侍)れ部家生駒の方様俄の思し立にて當れ家敷へ御越にムり升ると言捨て入る(武任)何にもせよれ部家の御入來とあれば應應の用意致せ我も奥にて支度をなさんと奥へ入る是にて此道具ふん廻す

●武任郎奥の間の場 本ふたい三間の二重、上下塗骨障子家

持たせ参りし瓶子を取つて叩く。武任は思入あつて瓶子の酒を庭の秋草にかけける。是を薄ドロくになり秋草仕掛にて倒れる。此時武任と夕波生駒とれ倉顔見合せ思入。此時下手より奴唯助出てり。切戸の外にて立開をする(武)然しながら此密事を勤むるものはハテ何者が、ト思案のこなし。此時唯助内へ入り(唯助)其れ役目私が勤めませう(武)汝や若徒唯助ならずや、生駒どの如何致したものでらう(生)密事も開れし上からは隠して詮なし望みとあらば申附るが宜しいかと存じ升る、ト是にて武任懐中より連判状を出し血判せよと差出す。唯助は血判する。武任はサラ々々ど一書を認め(武)是なる役目首尾よく仕課せるに於ては千五百石宛行ふといふ墨附唯助是を遣はさう(唯)難有うムリ升るシテ此儀を討る時節は(武)來月二十三日は例年の恒例として家中一統三夜待を行ふ。天子に供ひし神酒を後にて頂くが定例なれど、御刀が際忍び御酒の中へ夫なる毒酒を人知れず、ナア、ト上は最前の二人をば、ト切て仕舞といふ仕方を(唯)スリヤ奥様とた倉殿を(武)ア、スリヤ、ト押へるのが知らせにて此道具ふん廻す

●相良邸奥庭の場 本ふたい通り高二重手摺附一面の廊下、向ふ奥庭の遠見、庭木の植込飛石、すべて相良邸奥庭の体、爰にれ倉短刀を持ち立懸り居るを夕波止めて居る、此見得合方にて道具とまる(夕波)心はやるは尤もなれどマア、ト待ちや(れ倉)夫ぢやと申て(夕)待と言はばマア、トまちやうなたも共に聞

た通り夫の悪逆逆も死る命ならぬ聞入ない迄も共に妾が力と成りれ諫め申してたもつた上(倉)ね聞入れのない時は(夕)二人一緒に刺違ひて(倉)其れ心と聞上は(夕)かなはぬ迄もね諫め申し(倉)操を立るが女の誠、ト夕波はこなしあつて上手へ入る。此内廊下の下手より武任出て來り(武)スリヤ倉其方何を見たる聞たる(倉)イ、エ何にも(武)聞ぬとあれば夫でよし奥の客の響應いたせ(倉)ハイ、ト下手へ行かうとするを武任後より抜打に肩先切り下げ屹と見得是を胡弓入り雪の獨吟になり立廻りあつてれ倉を切倒し止を刺す爰へ夕波出て此体を見て胸くり爲し(夕波)ヤ、コリヤね倉を、ト駈寄を(武)汝も生ては、ト又切附け立廻り種々あつてド、切倒し止めを刺す爰へ下手より鷹助出て來り(鷹助)コリヤ奥様を、ト胸くりするを(武)水を持って、ト刀を差出すが木の頭にて鷹助はハイといひながら慄ふて居る。此見得宜敷拍子幕

●三幕目

役人替名

天野 藤内	霞 仙	大川 橋六	卯三次
同 ね 卷	當 若	茶店の唄太筆	卯女藏
同 た さ く	小 卯 三	正月屋 岳平	我 當
同 た た き	勇 次 郎	一仕出し	四 人
若 徒 惣 助	卯 三 郎	一仲間	三 人
石 部 金 藏	藤 藏		

●富田八幡社内の場 本ふたい平ふたい向ふ一面筋堀、上手に鳥居玉垣石燈籠、下手茶店の出し掛けすべて八幡社頭の体、神樂にて慕明く、ト仕出し大勢捨せりふにて鳥居の内へ入る。直に向ふよりね巻れさくね瀬世話娘の拵へにて出て來り又もや今の酒の酔の來ぬ間に此茶店へ隠して貰はふと捨せりふにて茶店の内へ入る。茶店の女房ね筆は手桶を提て下手に入る。三味線入り神樂に成りて花道より天野藤内前髪大小深編笠にて出て來たり(藤内)今日は放生會なれば當八幡宮へ参詣いたせしがハテ賑はしい事であるわいと、ト茶店の床几に腰をかける。此内向ふより石部金藏大川橋六酒の酔たる舉動にて陰々として出て來り最前一の鳥居で見附た女定めて貴様隠したであらうサア出し居らうと、胸ぐら取るを好き程にあしらひ追ひ返し跡見送り(藤)武家の祿を食みながらハテ切困つた糞ぢやわいと、ト此時茶店の内より娘三人出て來り禮を言ひながら藤内の男振に見惚て居てなし。此時以前の酒の酔又鳥居の内より引返し出て來り先刻知らぬと言ひながら斯うして爰で減し合ふ不届きな奴と言ひながら抜打に双方より切てかゝる藤内胸打にて散々に打掃投退る酒の酔兩人は下手へ逃て入る。藤内は楚爾思入あつて鳥居の内へ入る。跡娘三人捨置詞にて此道具ふん廻す

●徳山家中町の体 本ふたい平舞臺一面腰板の屋敷塀所々に武者窓、すべて周防徳山家中町の体、入相の鐘にて道具とまる、ト向ふより岳平(我當)袖無し半天尻からげせんさいの荷を擔ぎ

出て來る是ど一時に仕出し大勢出て來り銘々善哉を喰ふことあつて下手へ入ると花道より岳平の娘ね巻小提灯をもち出て來り富田の八幡にて酒の酔の悪侍士に出會ひ難義の處未だ年若き好い男振の武士に救はれたとの物語りをする。此時武者窓の内より侍一人首を出し(侍)コリヤ、善哉屋澤山に入用なれば裏門へ廻れ(岳)ハイ有難うムリ升、ト娘をつれて下手へ入ると上手より以前の藤内下手より若照惣助脚半草鞋にて出て來り(藤内)其方は帶刀殿の召使ひ惣助ならずや(惣助)サ、誠に久々の御拜顔ねみられ申して居りました(藤)何は扱置き主君帶刀殿には無事に勤仕致さるよな(惣)イヤ主君には天神山の狩倉の御御諫言申上御附門仰せ附られ吉敷村の廢邸に御不自由な住居でムリ升る(藤)シテね國の御政治は(惣)相良武任様にムリ升る當春以來君のね覺ね殊に目出度生駒といゆる女を勤め候様を以て君を感はし忠義の臣を遠ざけて日夜を分たす酒宴遊興(藤)其生駒と申すものは若や服部岳平が娘ならずや(惣)其儀は確と存じませぬと主君を感はす毒婦にムリ升る、ト是を時の鐘に成り、下郎は急ぎの使ひにムれば是にて別れ申升る、ト上手へ入る(藤)合點のめかねは生駒といゆる女拙者親と親との許嫁、ト言ひかけ氣を變ひ、何は兎もわれ今宵は乘福寺の方丈に一泊し明日歸宅の上何彼の事を夜更ぬ間にドリヤ罷らうか、ト向ふへ入る。此以前よりせんさいや岳平娘ね巻出て來り後にて様子立開して居る事あつてね巻は跡見送り見惚て居る者を叩くが木の頭にて

此道具ふん廻す

善哉屋岳平住家の場 本ふたい上手在体の中遠見、下... 屏好き所に門口、すべて町番所岳平住家表の体、茲に岳平に...

岳平住家奥の間の体 本ふたい向ふ押入納戸口、すべて岳... 岳平の体、茲に藤内岳平に巻すまひ時の鐘合方にて道具とせる...

を騙す娘生駒唯一ト討とは思へども夫もかなはず何卒不所存... 生駒の代りに妹を妻に持ってもらひたい(藤)武任と心を合せし...

役人替名

Table with 2 columns: Actor Name (e.g., 陶五郎長房, 生駒の力) and Role Name (e.g., 我當, 若松).

大内館評定所の場 本ふたい通の二重、向ふ正面金襴... 大綱間をわろし、正面に大内義隆袴羽織にて左右に近習大勢控...

行方知れず夫故吟味致しくれよと数度の訴訟開捨には成り難し... 何れも腹藏なく所存の程を申し見よ(鐵之助)ハ、此程より足...

常住寺門前の場 本ふたい一面に崩れかゝりし塙、上手寺... の門、好き所に摧れかゝりし辻堂、一面に芒秋草の植込み、す...

常住寺門前の場 本ふたい一面に崩れかゝりし塙、上手寺... の門、好き所に摧れかゝりし辻堂、一面に芒秋草の植込み、す...

役人替名

陶五郎 長房	我 當	中川 清哉	卯十郎
同 若 光平	霞 仙	中間 内助	佐十一郎
大澤 鉄之助	我 重	岩倉 玄義	當十郎
今 阪 郡六	琥 六郎	捕 入	大 勢
太 田 才助	藤 藏	足 輕	二 人
岸 本 林八	當 久治	中 上 升	一 人

●大内家白洲評定の場 本ふたい三間高二重向ふサヤ形の大襖、上下屋敷塀、白洲階子、すべて大内家白洲の体、ト二重の上に鉄之助郡六上下にて住る、平ふたいに仲間傳助八内控の下に仲間六尺棒を持立懸り居る、此見得時の太鼓にて幕明く、昨夜寶藏へ盗賊忍び入り大内家の重寶照照鏡を奪ひ去り藏番に殺害に及びしに就て詮議するとの密詞ある所へ太田才助中川清哉の蔵中、裏菊の紋附たる長房の印籠を持出て来り一家中に此紋所を用ふる者陶長房の外一人も無し必定陶が所業に相違なしと評定する折柄下手より岸本林八今朝櫻の馬場馬見所に於て照照鏡を拾ひしとて走り出て来り袋を開き改むるに中なる鏡は偽物なりしかば一同打愕し呆れる事有て此旨相良武任殿に言上し裁断を仰がんと言合せ此道具ふん廻す

○陶長房邸の場 本ふたい平ふたい正面床の間違ひ棚上手障子家体、すべて長房屋敷の体、爰に長房の妻濱路屋敷風の女

房の拵らへにて床間に月天子の軸をかけて居る見得合方にて道具納る、ト若徒光平走り出て来り今齋を明ければ昨夜寶藏へ盗賊忍び入り名鏡を奪ひ去りしとて家中一統上を下への混雑なりと物語る處へ近習一人出て来り使者として岩倉玄藏様を越にり升ると言捨て入る此時奥より長房出て来り使者の到来とあれば出で迎はん其方等兩人は次へ立テ退座させる此内向ふより袴股立取たる侍 大勢バヤ〜と出て長房を取巻き屹となる(長房)コリヤ理不盡に何と召る(捕手)論は無益ソ、ト十手にて打てかゝる是より柔術本手の立廻りあつて捕人は逃て入る直に向ふより岩倉玄藏出て来り(玄)御疑ひの筋あつて引立參れと主人の嚴命夫でも貴殿は手向ひ召るや(長)いかにも手向ひ仕る趣意を聞き其内はいつかな細目は受け申さぬ(玄)然らば其仔細申述ん、ト是より寶藏に忍び入りし盗賊菱の中に裏菊の定紋つけたる印籠を落し置けり此定紋は陶家の定紋なれば必定此盗賊は汝の所業なりとの疑ひにて御前へ引くとの長せりふあつて、サア尋常に腕廻されよ、ト吃と成る(長)此廣き日本に此定紋用ふるもの拙者一人にも限るまじ此紋を證據とせば日本國中此定紋つけしものを一々賊なりとて搦め捕召るゝか(玄)ト、(長)定紋を以ての證據呼はり近比もつて龜忽千高(玄)ヤア龜忽との一言は主君を蔑如なす不禮の言葉(長)決して主君を誹謗仕らす御疑念あらば一應も再應も糺せし上細かけらるゝも理かるまじ夫に何ぞや趣意も述す捕人の人数を差向らるゝは何と龜忽

●六 幕目 奥

返す

愛妾生駒の方	灘之助	陶 五郎長房	我 當
大内 隆隆	若 松	大澤 鉄之助	我 重
今 阪 郡六	琥 六郎	岸 本 林八	當 久藏
太 田 才助	藤 藏	捕 手	大 勢

役人替名

●月宮閣の場 本ふたい一面網代塀を繪きたる道具幕合方に幕明く、ト羽織袴の近習四人出て来り今日は九月二十三日にて當大内家の恒例に依り此月宮閣にて月天子を祀り主君には生駒の方と畫の間より御酒宴の御催しありとの密詞四人に渡り上手へ入ると床の淨溜璃に成る 上るり抑も月宮閣といふは棟高うして雲に聳ゆ玉の甍は霞に埋れ金銀珠玉を鏤ばれたる 櫺斜めに階梯かけ周圍りは月を弄ぶ池の汀の緑水の秋を着飾る紅葉の錦彼の唐土の銅雀臺も斯やと思ふばかりあり、ト是にて網代幕切て落す

●月宮閣長房諫死の場 本ふたい正面三間大高の二重黒塗勾欄花鳥を畫きし腰板、勾欄附の棧橋を掛け、舞臺前に泉水、向ふ奥深に庭の遠見、一面に秋草の畝、紅葉の釣枝、すべて大内家月宮閣の体淨溜璃にて幕明く、ト前幕の長房出て来り(長房)伍子胥は諫めて軍門に眼を曝す我子胥には及ばずとも忠義の心は劣るまじ今日こそは死を以て君を諫めん吾決心主君の御返答

ではらぬか、ト言ひ伏られ蔵言句に詰りし思入あつて(玄)一旦主君より疑念蒙りし上からは出仕は無用申開きの相立まで暫居召れ屹度此旨申渡す、ト向ふへ入る是より床の淨るりに成り長房沈思のこなし此時奥より妻の濱路出て来り(濱路)此程より毎夜供をも連す氏神八幡へ御參詣をなさるにつけても昨夜のね歸りの遅いといひ殊には御所持の印籠が、ト言ひかけるをコリヤと押へて(長)昨夜寶藏に忍び入りし盗賊といふは則長房、ト聞て、ト打驚くを(長)其驚きはさることながら是には深き仔細あり、ト是より愛妾生駒は正しく常住寺の妖怪が變化ならんと見極めたるを以てね家に傳わる照照鏡を以て彼を照し其正体を見顯はさんと思ひ昨夜漸やく藏番の隙を伺ひ名鏡は盗みしなれと何者とも知れず忍び姿の者に出會争うる機会に鏡は失ひたり行衛知れず然るに其時來合せたる一人の武士あり忍びの者の一味の者か但し又ね家の重寶を覗ふ者か俟て妖婦時を得顔にね家に跋扈る現今の光景中國に毛利出雲に尼子四國に長曾我部九州に太友島津隣國敵ならぬ所もなき此戰國の最中なれば盧に乗じて敵勢不意に寄來らんも計り難し左ある時は敷代續きし大内の家も滅亡なすは必定此上は死を以て國家の爲に御諫言申上んとの長せりふあつて(長)萬一御採用なき時は是が此世の永き訣別に、トほろりとして氣を替るが木の頭にて(長)出仕の用意致しやれ、ト勇ましくいふ此もやう詭らへの合方にて拍子幕

ト幕引附ると跡塀物にてツナギ道具出來次第早幕にて引

が生死の境、ト思入ある此時敵役の諸士四人ハ、ト出で、ト閉門塾居の身をも省みず推て参る事不届きの振舞なり、トト追取巻きト、抜打に切てかゝるを四人を相手に立廻りあつて上手へ追込む此時高樓の内にて(生駒)我君様、トいふ長房聞つけ(長)アノ聲こそ正しく生駒、ト息込む此時正面の御簾を捲ける、ト爰に愛妾生駒住んで居る此時什掛にて泉水に猫の姿映る長房屹と見て(長)今此池に映りし姿は正しく變化たのれ妖婦覺悟せよ、ト生駒を切んと身擗る此時大内義隆出て来り(義隆)手に手向ひ致す不忠者め、ト屹といふ(長)チエ、れ情けなき我君様、斯申せば君の非を擧るには似たれども當春以來君の御行跡酒に耽り色に溺れ玉ひ、ト諫言の長言詞あつて、ト或は歎き涙と共に諫むれば生駒は懐劍逆手に取り將に自害と見ゆければ義隆慌て押し止め給ひ(義)コハ何故の生害なるぞ(生)何故とば情けなし、ト是より下腹に育ちし身が忽ち君の寵を得た、ト人々の嫉みを受け人間に非ずして變化妖怪なりと痕跡もなき悪名をつけられぬ此事世間に流布せば君の名を汚すに似たればとの長せりふある(義)イヤ死ぬるに及ばぬ變化でなき事余が證據、コリヤ長房義隆程の刀取を變化に化せられしとは主人を誹謗なす不禮者ソレ者共長房を打て取れ、ト下知に隨ふ數多の近習刀矢携ひ出來り既に斯うよと見ゆれば(長)我諫言れ用なきときは生存て甲斐なし長房が最期の程を見物せよ、ト刀逆手に我腹へグツと突立苦し息を嚔とつぎ、假令死すとも

一念館に止まつて佞人妖婦を退けて大内家を無事に治めて置べきや、トさりく立ながら引廻し殿前を掴み出し高閣の天井に投つける、ト魂魄といひる血天井最期の程ころ、ト床の三重に成り長房は絶命の義隆は天井を見上る此もやう宜しく拍子幕

七幕目

役人替名	
冷泉 帶刀	三五郎
仲 四 傳助	佐十郎
同 八 内	雁 若
同 權 助	卯 多 松
同 可 内	扇 太 郎
大 澤 鉄 之 助	我 重
今 辰 郡 六	琥 六 郎
若 徒 唯 助	藤 藏
同 惣 助	卯 三 郎
冷泉 帶刀 閉門の場	本ふたい向ふ一面の白壁の堀、上手青竹を十文字に打たる門、下手番部家、すべて帶刀閉門の体幕あり、ト仲間八内傳助草鞋を作つて居る爰へ仲間雁助毒酒を入れたる瓶子と三升樽を掲げ出て来り三人酒盛を初める此内冷泉の若徒惣助(卯三郎)月待にて月天子へ供ゆる御酒を入れたる徳利を持って出て来るを三人の仲間捕はて無理に勘めて酒を飲ませ酔ひ潰れて寝込む間に雁助携へ来りし毒酒を御酒と入れ替へ

は次第に廻り来りて血を吐き虚空を掴み煩悶する所へ以前の唯助出て背後より斬り殺す此時惣助使ひ行く途中にて頻りと胸騒ぎして苦しければ留守の事氣懸りなりとて引返し出て来る唯助は驚き行燈吹消し抜足にて逃れ行かんとする所を惣助帶刀捕て引戻し兩人立廻りになる此時二十三夜の月を出す是にて兩人顔見合せ(惣)れのれは唯助(唯助)南無三失策た、ト惣助を突倒し向ふへ逃て入るを惣助後より追駈て入る是にて道具返す

● 帶刀毒酒の場 本ふたい向ふ床の間邊に棚上下障子家体、すべて冷泉屋敷奥の間の体、爰に帶刀昔見をして居る合方にて道具納る、ト大澤鉄之助今辰郡六出て来り過る日寶藏へ合鍵を以て盜賊忍び入り重寶照應の名鏡を奪ひ去りぬ其翌朝櫻の馬場に名鏡の打捨ありしを以て拾ひし者あり諸人立會ひ改め視ると

● 右田の里辻堂の場 本ふたい平舞臺向ふ野面の中邊見、上手に辻堂、下手裏原、爰に百姓四人坊主快典車座になつて酒を飲で居る見得、時鐘合方にて道具納る、ト今宵二十三夜じやに依て村中の者が斯うして月待酒を呑むの聲詞皆々に渡り酒を呑ひ間ち快典は善哉屋岳半の娘を巻父に死別れ野邊の營み後の吊らひに差支ぬ困り居りけるを此村に住むた虎といふ婆々親切らしく見せかけ金を貸し夫を餌として巻を我家に引取り養ひ居れども是から先は下の關博多あたりの遊女に賣て金にせん較計なりとの事を語り尙も酒を酌みかわしける所へ六といゆる女來りた虎が許に居りける娘の巻家出して行衛知れずとて虎珠の外に騒ぎ居れば村中の交際なれば俱々に手分をして捜さねばならぬといひて皆々下手へ這入る直に前幕の岳半の娘巻はしはくしてと出て来り裏原に立たる父の卵塔に合掌しれ虎婆々の爲に下の關へ勧め奉公に行けと追られ遊女となつては許嫁

● 此道真ん廻す 是こどわつて此道具を廻す

● 帶刀毒酒の場 本ふたい向ふ床の間邊に棚上下障子家体、すべて冷泉屋敷奥の間の体、爰に帶刀昔見をして居る合方にて道具納る、ト大澤鉄之助今辰郡六出て来り過る日寶藏へ合鍵を以て盜賊忍び入り重寶照應の名鏡を奪ひ去りぬ其翌朝櫻の馬場に名鏡の打捨ありしを以て拾ひし者あり諸人立會ひ改め視ると

● 右田の里辻堂の場 本ふたい平舞臺向ふ野面の中邊見、上手に辻堂、下手裏原、爰に百姓四人坊主快典車座になつて酒を飲で居る見得、時鐘合方にて道具納る、ト今宵二十三夜じやに依て村中の者が斯うして月待酒を呑むの聲詞皆々に渡り酒を呑ひ間ち快典は善哉屋岳半の娘を巻父に死別れ野邊の營み後の吊らひに差支ぬ困り居りけるを此村に住むた虎といふ婆々親切らしく見せかけ金を貸し夫を餌として巻を我家に引取り養ひ居れども是から先は下の關博多あたりの遊女に賣て金にせん較計なりとの事を語り尙も酒を酌みかわしける所へ六といゆる女來りた虎が許に居りける娘の巻家出して行衛知れずとて虎珠の外に騒ぎ居れば村中の交際なれば俱々に手分をして捜さねばならぬといひて皆々下手へ這入る直に前幕の岳半の娘巻はしはくしてと出て来り裏原に立たる父の卵塔に合掌しれ虎婆々の爲に下の關へ勧め奉公に行けと追られ遊女となつては許嫁

代の許まで此書面を送り届けよとて出し遣りける其跡にて毒酒

ければ死を極めたりとの獨言ありて傍への井戸に身を投ん
る折柄は虎婆々と以前の百姓出て来り巻を伴ひ歸る其跡
助出て来り百姓等が飲み残せし酒のあるを見て打喜び酒
其内に快典歸りかゝり打腹立て掴みかゝるを唯助快典に一ト當
より追ひ廻し絶せ立去んとする時以前の惣助跡追出て来り是
ひし三十兩の金を落し快典に拾われ土橋より流れ川に陥入るが
木頭にて拍子幕

◎八幕目

役人替名

展 北 巻 當 若 庵主快典 市 六
喝 北 六 琥 六 郎 惡婆老虎 卯 三 郎
狸の金兵衛 三 昇 若徒唯助 我 當

虎住家の場 本ふたい平舞臺向ふ押入納戸口、上手
折廻り障子家体、すべてね虎住居の体、在郷明にて幕明くと囁
のれ六出て来り快典坊主此程金儲けせしとやらでは是非に此家の
娘を巻を周旋てくれとの私への頼みなりと諒すれ熊は金にさへ
なる事なら世話をたのむと言ひ合せて六の跡へ前幕の唯
助出来り御家老より大内家定紋桐の極印打たる三十兩の金もら
ひしなれと落し知れず然れども家の重寶照應鏡といふ鏡も
所持なし其上に武士に取立てやうといふね墨附の持て居ば
金には不自由なれども惣助といふ男に追出られ若し捕へられ

を唯助取て投るが木の頭にて此もやう宜しく床の三重時の鐘に
て拍子幕

◎大詰

役人替名

若徒唯助 我 當 相眞武任 三五郎
生駒の方 瀧之助 陶 晴賢 佐十郎
天野藤内 霞 仙 帯刀の妻千代 のしほ
娘 北 巻 當 若 辰元梅の月 三 昇
大内義隆 若 松 同 小 櫻 當 子
今取郡六 琥 六 郎 同 同 紅 葉 妻之助
岩倉玄藏 當 十 郎 同 同 同 同 芝 市

●大内家太廣間の体 本ふたい平舞臺向ふ大形の襖、大欄間
をわろし、すべて大廣間の体、爰に敵役の諸士居列び合方にて

幕明くと我々が一味せし相眞武任の大望粗々成就し唯助魔者に
なるは冷泉帯刀一人なりしが是も唯助助といふ二人の仲間
際附け毒酒を以て殺したれば此上は大内家の政事は思ふまゝな
り然りながら如何にせしか唯助助の兩人歸り来らざるは萬一
捕へられしものには非ざるかと心痛なし額を鳩めて評議する所
へ相眞武任出て来り今日主君義隆月宮閣に於て生駒の方と酒宴
を催はし居れば隙を視ひ違矢に射かけ大内の國家を押しせん目
算なれば必らずぬかるなど四人に違矢の役を言ひつけ我も其支
度をなさんとて立んとする所へ長房の父陶晴賢帯刀の妻千代を
伴ひ出て冷泉帯刀を毒害せしは如何なる趣意あつての事かと膝

ては難義なれば暫じが間昔馴染に此家に居候させてくれと頼
み込み奥の間へは入る跡へね巻寺詣でより歸り来り今日は父の
三十五日に相當すればとて位牌の前に回向なし今のやうな難義
の場合には幼少にて別れし兄なりとも居たならば又問ひ談合も
せんなれと唯二重鶴の守袋を證據に巡り逢へど父の遺言あり
しのみ何所を尋ねんめなし述懐するを上手の障子を明けて
唯助立開なし扱は我妹なりしかとの思入ある所へね巻は快典を
連れ来り是非に今日に迫る金の入用ありて婆々の一命にもかゝ
わる程の大事なれば快典の意に随はと無理にね巻を納得させ快
典の拾ひし金三十兩を受取り改めてみれば唯助に聞た桐の極印
打たれば此金は昨夜妾が落した金じやと言ひ張て無理矢纏に快
典を追ひ返した巻に向ひ此上は下の關へ遊女に行けと無体な追
り判人の許へ引立行んとする所へ唯助飛で出でね巻を一刀の下
に切殺し十二の時に性根が悪さに家を追ひ出されたる娘が兄な
りと名乗て守り袋を證據に兄妹の名乗合ひをなし(唯助)今更ね
もへば是迄に仕盡したる悪事の段々報ひの程も空恐ろし切ては
少しの罪消滅しに、ト切腹仕様とする此時惣助奥より出て来り
(惣助)委細残らず是にて聞た是迄の悪心を翻へし眞人間になる
からには捨てる命を元手にして家爲に忠義を盡せ、ト諭され
夫も道理と忽ち同意し武任より貫ひし墨附を證據として謀企の
一味の輩をば取扱ひでくれんと三人一緒に城下をさして行んと
する此時以前の快典伺ひ出たのれね巻待居れと掴みかゝる

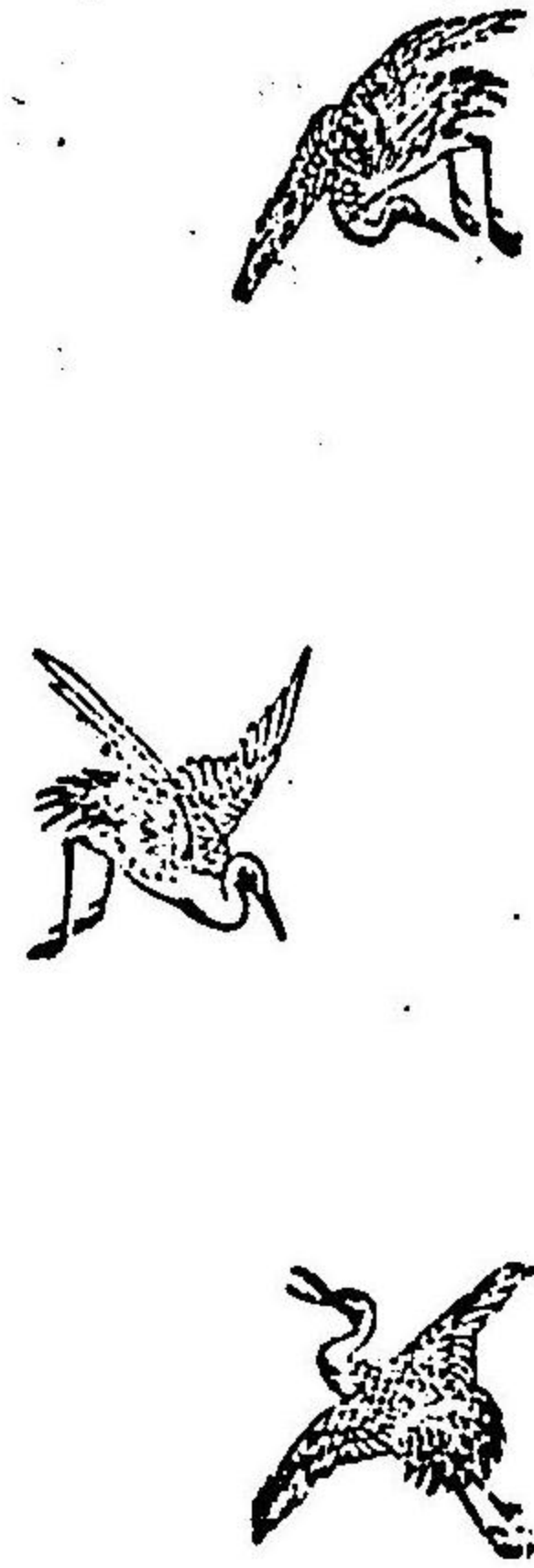
突つめて詰りかけるを武任は我が命じて殺させし證據ありやと
言ふ(晴賢)其證據といふは御邊の仲間助といふものを生捕た
り(武任)シテ其鷹助我に毒殺せよと命せられしと白状せしや
(晴)イヤ白状せねと拷問中に舌噛切て相果たり(武)然らば死人
に口なし何を證據に毒殺せしといはるゝや(晴)サア夫はサア
とと操上になり晴賢言ひ詰られる此時向ふ戸家の内にて其
證據にありと呼わつて仲間唯助走り出て来り毒殺の一條首尾
能く仕課せたる上は武士に取立得させんと認めたる武任の墨附
を示し是で動きは取れまいがな、ト屹度言ひつめる武任は最早
是迄なりと帯刀抜きより早く我腹にグッサ突立切腹するが此道
具かへし

●月宮閣酒宴の場 本ふたい六幕目月宮閣の裏手を見せたる

道具、上手生駒の方、下手に天野藤内住る道具納まる藤内は
今日是非にね巻家様にね目通り致したる由願ひの者あり拙者召
連参りし程に御目通り許されたしとて生駒の免しを得て願ひの
者急いで是へと呼び出すと岳平の娘ね巻出て来り平伏するを生
駒は見てコハ何所の者にて何用あつて達て目通りを願ひしやと
問ふ(藤内)何所の者とは事可笑しコハ御身の爲には實の妹に
巻なり(ね巻)僅か別れし其間に實の妹の顔をた見忘れなざる
とは(藤内)扱こは汝は天神山の妖怪にて眞實の生駒にあらざる
べしイテ正体顯はしくれん、ト唯助の盗みたりし名鏡を以て照
らす是にて生駒の方忽ち猫の本性露はし怪猫の荒れ狂ひになる

此時エト矢聲して白羽の矢飛び來り猫の咽喉に立つ藤
 是はと驚く所へ大内義隆弓矢携ひ出て來り妖魔に魅せら
 ひの夢も醒め斯く悪人妖怪俱に滅亡びし上からは大内の
 代不易なり是も偏へに其方等が忠義の功なり目出度し、
 此見得よろしく拍子幕 (終)

●記者申す本社は劇道の發達を圖らんことを豫期せるを以
 て斯道の有識家に謀り劇評討論會なるものを起し既に過
 日其第一會を催したり當日加藤紫芳牧野半醉井上笠園香川
 蓬洲勝歌女助の諸氏并に本社編輯員等相會し辨天座の劇評
 を論じ以て作者其作の長否俳優の技藝の巧拙等詳細筆記し
 本號に出さんとしたれども限あるの紙數なれば乍遺憾掲載
 せず何れ今後各座に就き詳細なる劇評を載せんとす讀者請
 誦せられんことを



外國演劇脚本

藤の家主人未定稿

緒言

佛國の戯曲を談する者、皆指をコルチーニョ・ラシーニョ・モリ
 エルの三作家に屈せざるは無し。而して前二者は悲劇に長ず
 ○ 特リモリエルは、喜劇其長所にして、傑作數篇あり。就中
 最傑作として世に知られたるもの三篇あり。即ちタルタッフ
 ○ ミザントロップ。ラムール。メドサン是なり。こゝに譯せ
 しは其一なるラムール、メドサンにして、原文頗る輕妙なり
 と雖も、譯者の筆鈍くして、其妙趣を傳ふるに能はず。唯
 其文意をたゞりて、ねぼろげに譯述するに過ぎず。登場の人
 物を我邦の姓名に擬したるは、譯者の記憶し易からん事を圖
 りてなり。看客幸ひに其心して一讀を給へかし

戀 煩 ひ (三幕)

序 幕

●主人(菅根善兵衛)ヤレ、私はど不幸福なものはないぞ。た
 つた一人の女房が死んでしまつた。出入の呉服屋(治郎兵衛)た
 つた一人と仰有いまするが、何方も奥様の二人ある方はござり
 ませぬ。而して幾人あつたら宜しいのです(菅)サア誰も女房
 は一人なれど、其一人にも一人に依る。治郎兵衛さんの前だが
 ○ 世の中に女房に死なれたは悲しいものはない。私は女房の

●外國演劇脚本



本舖 西區新町橋 妻鹿青松堂

定價
 金貳錢
 金五錢
 金拾錢

○たいどく○あたまたのくさ○はらはり○ひねのつかへ○
 のつさまし○ちををまし○たんせき○み目いたみ等
 の妙薬なり

事を想ひ出すと、泣かすには居られませぬ。尤も存命の間は氣
 に入らぬ事もあつて、随分喧嘩をしましたが。打たれどもあり
 ます。しかし死なれて見るといとうして、何も彼も勘辨する氣
 になり、死んだのが悲しうてなりませぬ。せめて産れた女の小
 兒が無事で居れば、些は氣分が紛れるのに、根性悪の天道めが
 片端から引摺つて行き、あとには唯一人の娘しか残つて居ら
 ぬ。其娘がまた何したることか、氣鬱病に罹りて、明けても暮れ
 ても鬱いばかり居るので、いつ私までが鬱いで來て、心配
 でなりませぬ。何で彼のやうに鬱ぎよるのか。聞いてもなかな
 か云ひ居らず。實に途方に暮れて居ります。どうして娘の氣
 鬱症を和げる工夫はあるまいかなアと、云ひつゝ雇妻の樂
 を始め治郎兵衛や小間物屋の重助等に切に相談を掛る。(重)は
 頭を掻きながら「ね娘さまの御病氣は、ね頭の物や何彼がはし
 いのかも知れませぬ。櫛管指輪などを思ひ切て張込んでお上げ
 ますつては何でございます(治)いや、そんな物より、ね召物
 がほしいのでございませう。ね召の衣裳、縮緬の羽織、織物唐
 編子、珠珍の帯などを、どつしり買つてお上げなされませ」ね樂
 も傍から口を出し、否々ね娘さまの病氣を癒すには、大方此世
 が厭になつたんでせうから、尼寺に入れて尼さんにしてお上げ
 なさるが宜しいと思ひます(菅)ね前方のいふことは、皆一理な
 いではないが、云はれ銘々得手勝手、我田へ水の論ばかり一つ
 も同意は出来ませぬ。ア、心配な。何したら宜いだらう。エ

花子や。なせれ前は其様なに變いでばかり居るぞ。なせ其原因をたてたがよい。親子の間に遠慮は入らぬ。何も彼も打明けて話したがよい。なせれ前は其様な顔を見るのが情なうてならぬ。なせれ前は私を心配死に死なす積りか。なせれ前は其弱の原因を開かせて呉れ。何か望み事でもあるなら、包み隠さず云ふがよい。何んな事でも否とは云はぬ。サア早く云ふがよい。何か買て貰ひたいのか。衣類がほしくば買て遣るぞ。指輪か指輪か。それとも演劇が見たいか。浄瑠璃が聞きたいか。何でも決して厭とは云はぬ。有體に云ふがよい。言葉も盡して尋ねる處へ、乳母のたりせが馳せ来り(りせ)モシ檀那さま。御病人のた娘さまに、何を尋ねなされます。ナニ御病人の仔細を尋ねなされますか(菅)最前からいろく、口の酸くなるは尋ね問へ、暇なだとも潰れたとも云はぬ不孝な餓鬼、もろく尋ねぬ勝手にしろ(りせ)是はしたり檀那さま。其様にれ氣短かく仰有つては困ります。サア私に任せ下さります。何とかして口をむしり、御病氣の根元を伺ひますから(菅)いやく最うろれには及ばぬ。彼奴が好きで戀ぐんだから。構はずと扱てけ(りせ)さう仰有らずと、どうなれ任せ下さります。手搦にかけてお育て申した娘さま、乳母の私へ御遠慮はなはい。ねえ娘さま。さうですわね。たどへた父さまにはれ話しくい事でも、此乳母に遠慮は入りませんよ。何なりと構はず仰有いませ。何かれ父さんに願事があるんですか。ろれな

ら左様と判然仰有いませ。可愛い一人兒の事ですものを、何んな事でも厭と仰有る氣遣ひはありません。サア何なりと早く仰有いませ。こうつと何たらう。ハ、ア解りました。誰かれ氣に召した男さんがあつて。其れ方をね親さんにしてはしいのでせう。エさうでせう。乳母の言葉に娘はな子は、耻かしさうに顔を火にして「さうだ」と願で軽くうなづく(りせ)ろれ御覽にませ。乳母が尋ねたら直に解りました(菅)いへ。私はもう構はぬ。さうなと勝手にしたがい(花子)ね父さん堪忍して下さい。私にはもう愛想が盡きました(りせ)モシ檀那さま。ね娘さまの御病氣は...(菅)否々彼奴は私が心配して死んでも構はぬのだらう(花子)ね父さん、私が悪うございました(菅)ろんな不孝な事をして育て上げた恩を仇で返す氣か(りせ)いへ檀那さま...(菅)私は恐しく腹が立た(花子)しかしれ父さん...(菅)もう(りせ)れ前には構ひません(りせ)しかしろれ何を何卒(菅)不孝な奴(花子)さう仰有らずと(菅)親に物を隠す不孝者め(りせ)ね娘さまはね親さんを(菅)私はもう構はぬ(りせ)ね親さまは(菅)不孝な奴だ(りせ)ね親さんを(菅)愛想が盡きた(りせ)親さんを(菅)エ、ろるさい(りせ)ね親さん(菅)構はず扱とけ(りせ)ね親さん(菅)何にも云ふな(りせ)ね親さん、ね(りせ)ね親さん！

未完

傳記

並木正三傳 勝歌女助

前號に其端を載せし氏が始めて工夫せしキノテヤノハノモノの狂言せり上げの道具の事は其以前寛保三年の幕大西にて中村十藏一座にて澤村宗十郎屋高助 齋藤山城にて油計りの狂言の時二階座敷を一面にせり上げしは並木末助弟子也の著作せし狂言にて其時のせり上げは幕明きより飾り附の二階にて前通り様側の高欄の両方へ摺柱を拵へ此上に立ちしは宗十郎一人故に重量も左程六ヶ敷からす然れ共正三氏が新に工夫せしは飾附の揚屋の道具を奥へ引とり奥より三間四方の板葺屋根を突出し此上にて中山新九郎大勢と立廻り有て追込一人残ると此處へ中山文七及今一人出て来り新九郎を誅め腹を切と此儘三人一時にせり上ると下座敷が道具成ると十藏歌右衛門定助四郎五郎立並居て二階より流れ落ちる血を呑みして瘡の病を治する趣向なれば都合七人をせり上げる其重量は永助の工夫せしと何程の違ひある論を俟ざるなり如何に大工棟梁の精神をこらすも萬力の仕掛真綱の取り様中へ氏なくしてなし得んや何ぞ凡夫の及ぶ所に非ず此狂言非常の大入りにて春正月の中の上り高を額前に背し樂家の鎮守の繪馬堂に揚げしは前代未だ聞ざり大當なりと賞賛せり此狂言四月迄大入りなしたり何日興行するも見物の減する事なく已に演ずる者の方より休業を乞はれしとは實に非常の事にありと今日より追憶するも其當時の盛なりし事空前絶後なりしや言を俟たず此後小栗太夫○愛護櫻○を合し五節狂と題し脚本脱稿せしも故あつて興行せず

未完

雜報

●尾上多見藏 は平生の性行舞臺にもに華麗やかなること、を好みしは人の知る處ある、安政年間京都四條北側の芝居にて、大切に石橋の所作事出さぬとて、多見藏仕打の松徳に向ひ此度は冬芝居なれば舞臺をグツと花やかにしたいから大張込に牡丹の釣枝を頼みますと眞顔に云はれて松徳呆氣に取られ、何程狂言締語でも紅葉や柳と違ひ牡丹の釣枝は看客が納まるまい、這的をやれば菊や山吹の釣枝でもせねばなるまいと笑ひながら答へしに負けず嫌ひの音羽やもギョツと詰り、併し本家さん唐土の牡丹ですから随分大木がないと云へませんと茶を濁せしに稽古場は大笑い。

大阪絶句帳 まさの家 半醉稿

●中村雁治郎 扇若丈いせ拾臺の頃父 断雀に伴なはれ名古屋末廣座の興行中菅原の道明寺に判官代輝國を引受け「身が名を銜つた偽役人直に逢ふては悪かるべし忍んで様子を窺はんと倍となり佩刀の下緒外して捕縄を捌く思入れの見得に抵

り、男衆の不注意にや下緒の付けて無かりしかば本人より鶴鶴を勧めし、鶴鶴は小心配にて何うして茶を濁すにやと見て居りしに、脚國手提こく袂より本ものやうな捕縄取出し、紋切形の見得にて柴垣へ這入りしに、左して穴も明かず却つて大受なりし、幕がめると、鶴鶴は鷹治郎に向ひ先刻の捕縄はトチラサに旨う往たか何うした理由か、夫とも頭取にでも聞か誰かの型形にやと問はれ、鷹治郎クツクと笑ひ、おれは老爺さんが危険から止めるがよいと叱られて居る鶴鶴の細が間に合ひました、の答に、鶴鶴は雀笑ひしてエ、倒しもの奴が

● 中村珊瑚郎 明治八九年の頃にやありけん堀江市の側の芝居夏興行の大切に團七茂兵衛を勧めしに、男衆等は居るに堪へかね少しの間も風透きの方へ避けて居りしかば自分一人は例の扮装のまの樂家の出格子に凭かより出場のキツカケを俵つて居るうち連夜の夜深しに遂に現々と眠氣を催はし、ブンと顔のあたりへ遣つて来る敷を手でヒツシヤリ、叩いてはまたコクリと遣つて居りしに、一人の男衆顔色變へて駆け来り、大方くモウ出場がトナル位ですと大聲に喚かれ、オイ、承知ぢやと眼をクシヤつかせながら小森から舞臺へ出ると、此時誰でありしか並木正三を勧めし、俳優思はず、嘘き出し「茂兵衛さん、前の顔は何うしたのぢやと詮方なく、よりにての幕は濟み樂家へ引込み鏡臺に向て見れば、コテ塗の顔に、敵の死骸と鮮血の中形小紋に、エ、ちと氣を付ぬかと男衆小口から糞を喰しと

記應のよき俳優の話し

總て物事の記應よきは、藝人に限らず、是れ程其身の徳なるは無きものなり、予が豫て懸念にする、俳優片岡我藏氏は、當時歌舞伎の立敵にて、藝道にも頗る熱心家なるが、實に記應のよきには、予も殆んど感伏せり、或日同僚が予が茅屋を訪ひ來り、種々の浮世話しも、いつとなく劇道の事に移りければ、予は同僚に問ふて「君は全體、如何いふ演劇が演て見たいと思はる、狂言は何が好きなるや」と尋ねしに、同僚は暫く考へ「サア、小優は何と云つて別に、自分が演て見たいと云ふ狂言もなし、假令あつた處で、我々が演ては、第一看客が其狂言を、見ては下さりませぬ、との答へなば「見て下さらぬと云はる、からは、演て見たい狂言があるのでせう、夫は如何な狂言です、彼れか是れか」と二三の皮肉もの、言並べしも、皆同僚の好む藝道にあらす、然れば何なりや、まづ云ふて見たまへ」と再三尋ねると「小優が演るせぬは借置き、名優が打寄りて、此狂言を演たらんには、應れもしるからんと思ふ狂言あり、記應せしだけをお話し申すべし、と語り出したるは「浪人盃」と云へる狂言にて、是れは「役者論語」とか云ふ本に、載せたるものなるが（以下同僚が話しせし狂言の筋なり）萩山の家中に、高阪采女と云ふ武士ありて、馬上にて使者に赴く途中、其道筋の景色なを稱する盛詞は、小性家來までも例の通りに渡り、采女は「向ふの館は響君の御國なれば、國境より行義正しく、何れ

も鹿相なき様に「なご」盛詞あつて、家來みな「領承の答へ

ある、ト諺になり、馬をめぐらしてしとく、と行く向ふより、深淵笠を被たる浪人、歩み來て悄然と平伏する、之を見たる家來は、咎めて「ヤア何奴なれば、慮外の其編笠、何故とらぬや」と云へども返答なければ「汝推参な」ト家來どもは立寄らんとする處を、馬上の采女は「ヤレまて、彼者我に向ひ、平伏の體相見れば、是全く慮外にもあらず、然りながら笠を取らぬは心得ず、コリヤ、其な男某に向ひ、用ありげに見わたるが、如何なる人か何用あるか、仔細を聞かん」と云ふと件の浪人は、容を正して「采女殿には御堅固の體、先以て大慶至極、以前御懸念の拙者なれども、年隔たれば聲をも聞忘れたまふべし、今日貴殿が此道筋を、ね通りあるよし承まはり、あまりの御憶かしさ、最前より待受け、御馬の前に平伏は致しながら、御勸氣を蒙りし此身なれば、顔を貴殿に見せ申すも恐れあり、又面目無く存するも、慮外の編笠、眞平御免」ト云ふ中、采女は思入あつて「ふ、偕ては貴殿こそ以前の傍輩、辨右衛門殿よな、此方も憶かしく存する、某は御用の道馬上は御免、編笠を慮外と申すにあらず、お顔が見たい、お斷りの段何の苦しかるべきや、サ、其笠を取りたまへ、辨右衛門の違ひはござるまい」ト言葉をかけられ「偕てく、能く御推量、如何にも辨右衛門がなれの果、お耻かしや」ト笠を取れば「先づは御無事で「たえしや」ト互に昔を思入思入あつて

當り狂言の垣原 劇史摘要 勝歌女助寄稿

歌舞伎の歴史 忠臣蔵 或る劇通の秘蔵せる芝居天狗と懸せる者を散見するに曰く世に専ら行はるゝ忠臣蔵の權輿は外題をいへば、評林と云元祿十六年未の歲東武なる俳諧師寶善齋其角の許より浪花の何某へ來りし書翰の文中に「上略」此程の一件も二月四日に片附候て其贈取り「花やかなる説も多しして無上忠臣との取沙汰此節其事斗りに「候、堀、勘、三座にて十六日より曾我夜討に致し候て十郎兵衛長五郎に致し候へ共當時の事遠慮も有べき由とて三日にて相止め候と云々是等趣向の始にて大阪にては寶永七年元祿十六年より、篠塚庄松座に於て吾妻三八作にて篠塚治郎左衛門内、左野川萬菊の役勤めしが歌舞伎狂言にて興行の始めなり此狂言に、來京大阪に於て數回興行の後延享四年京都中村采女座にて大矢紋四十七本と題して澤村宗十郎大岸の役に六月朔日より初日に大當り其評判四方に高く大阪にも同じ外題にて市山助五郎大岸宮内の役を勤めたり其後寶曆十一年己十一月廿二日より大阪角の芝居中山文七座にて泰平いろは行列明和八年京四條北側西の芝居尾上采女座にて小袖藏いろは配安永六年十二月八日より大阪角の芝居小川吉太郎座にて「日本花赤穂戀」是等も追々出て皆非常の當を採りしと雖も忠臣蔵と題せる脚本出來て後は此脚本を第一として是に新工夫を加へ漸次精密に成れるなり

(未完)

●廣告

止風俳道の憲法書豫約出版廣告

訓 俳諧古今抄 全一冊

四六判二百頁
正價二十五錢
豫約實價廿錢
郵稅四錢郵券
代用壹割増し

本書の載する所は諸雅俗の既に知らるゝ通り祖翁の貞享式三巻拾遺十箇條即一理萬通一卷、新撰東花式即萬法一例一卷、の三書を日月星の三光に象り俳諧古今抄と題して刊行せしものなり、我正風の憲法とも謂つ可書は是を措て他に求むべきなし、故に社は此書を校訂翻刻し原價を以て俳諧の友愛讀者及斯道有志者に頒たんとす大方の雅俗速に申込ありたし製本出來は十一月末日其以後は正價に復す目録は左の如し

再撰貞享式目録 ○印は本式の目録△印は再撰の附録なり
○俳諧と俳諧に字論の事○俳諧に諷諷の道ある事○六義に今の和訓の事○發句に切字の道理ある事△心切の事△中の切の事△換切の事○切に三段の差別ある事△二切の事△三切の事△△にまはしの事△大廻しの事△玄妙切の事△押字と抱字の事△句讀の切の事△無名の切の事○二品切の事△浮載の事△第三の事○百韻の表は八句の事△か切の事△し切の事△と句作の事△波の事△四句目の事△折に曲節地の事△夏冬の事○季節の事△内秘の事○月花の事○四季の事△格の事△四季の事○各所の名類の事○俳諧に假名遣の事 惣合十九條 外二書○目録は略す

大阪南區大寶寺町仲ノ丁八拾六番屋敷
坂後 圖書出版合名會社

社告



本社集金係りの者は上圖の印章を捺せし請取證書を以て代金請求に差出し候間是に照して御支拂被成下度候也

一本誌廣告料ハ五號活字廿八字詰四十行ヲ以テ半頁トス
一頁前金三圓五十錢 半頁前金一圓九十錢 表紙裏一頁前金十圓 裏表紙一頁前金八圓 同半頁四圓五十錢
本誌廣告ハ半頁或ハ一頁ト纏リシモノニ非サレハ掲載セズ半頁以上ト雖モ其端行數ハ謝絶ス

明治廿七年十月四日 内務省許可
明治廿七年十月三十日 印刷
明治廿七年十一月二日 發行
正價金六錢
大阪南區大寶寺町仲ノ丁八十六番屋敷
發行所 坂 俊 藏

發行所 大阪かぶさ新報社
同 坂後 圖書出版合名會社
同 兄弟 圖書出版合名會社
同 三輪源兵衛

同 警籍雜誌肆
市內新聞雜誌店繪卿紙屋並ニ芝居茶屋等へ差出シ候間御便宜